

解題

詩聖堂詩話

一卷

大窪 行 著

大窪行、字は天民、詩佛、瘦梅、詩聖堂、江山翁は、皆その別號なり、通稱を柳太郎といふ、因て又た柳坵居士と號す、常陸の人にして、江戸に住せり、市川寛齋の江湖社に列し、柏木如亭、菊地五山等と交り、詩名海内に噪がし、後ち山本北山に師事せり、天保八年に歿す、壽七十一。

此書は、専ら宋詩を鼓吹し、江湖社同人及び知友の作にして、風調絶佳なるものを録せり、其の書たる纔に一卷に過ぎざれども、尤も佳話に富めり、五山詩話堂と相伯仲せり。

詩聖堂詩話序

詩佛之詩話者業鏡也、一高挂善惡皆見焉、遂教人知驚人詩、今現在、而發真詩心、然這裡不免有三途業報、何也、欲以降伏惡詩、大廣宣清新、此是貪使俗詩家殆氣死、此是瞋吟易官、咏易祿、翰墨以易財利、苦心以易樂意、豈不亦癡乎、佛而墮泥犁、大方便、大神通、凡夫固不得知也、嗟呼、罪詩佛者、其唯詩話乎、知詩佛者、其唯詩話乎、余搔首問青天、耳詩佛者、天民又字也。

己未歲涅槃後一日

奚疑主人題

詩聖堂詩話

柳 坨 居士 著

咏櫻者、以平城御製爲始、云、昔在幽巖下、光華照四方、忽逢攀折客、含笑宜三陽、送氣時多少、垂陰後短長、如何此一物、擅美九春場、次之者爲僧圓旨、圓旨、曆應年間人、曾入元學道、有七排一首、云、名壓群花顔色稀、梅慙太瘦海棠肥、淡紅微上玉人頰、潔白粧成羽客衣、遙認雪殘猶未盡、近看雲簇不曾飛、預愁夜雨洗將去、又怕春風吹得歸、遊賞紛紛傾合國、訪尋剝剝扣幽扉、當時若使吳王見、西施應須出禁闈、及寬永中、石川丈山有垂

櫻を咏するは、平城の御製を以て始と爲す、云、昔幽巖の下に在りて、光華四方を照す、忽攀折の客に逢ふ、笑を含んで三陽に宣し、氣を送りて時に多少、陰を垂れて後短長如何ぞ此一物、美を九春の場に擅にすと、之れに次ぐ者を僧圓旨と爲す、圓旨は曆應年間の人、曾て元に入りて道を學ぶ、七排一首あり、云、名は群花を壓して顔色は稀なり、梅は太瘦せたるを慙、ち海棠は肥たるを、淡紅微く上る玉人の頰、潔白粧ひ成す羽客の衣、遙に認むれば雪殘して猶未だ盡きず、近く看れば雲簇りて曾て飛ばす、預め愁ふ夜雨の洗ひ將ち去らんことを、又怕る春風の吹き得て歸らんかと、遊賞紛々として合國を傾け、訪尋剝々として幽扉を扣く、當時若し吳王をして見せ

櫻詩云、一樹千絲二丈長、繁英袅娜發幽香、
 此花若在唐園裏、何使楊妃比海棠、後闕明
 宋景濂集、有絕句云、賞櫻日本盛於唐、如彼
 牡丹兼海棠、恐是趙昌所難畫、春風纔起雪
 吹香、近世閩僧道本來住、我長崎、亦有作云、
 東來初見此花奇、無限春叢讓白眉、的皜嶺
 珠三百斛、玲瓏玉樹萬千枝、何妨穩李先春
 豔、不與寒梅遜雪姿、若使姮娥宮裏種、清光
 多似桂開時、此外無聞、故中野素堂有句云、
 吟人何事尤疎漏、如許名花久欠詩、如源栲
 亭、太田玩鷗諸人、各有其詩、亦未足稱、唯柏
 舒亭絕句獨佳、云芳根不許傳西土、留作東
 方第一花、大抵咏櫻併言梅花之清、海棠之
 豔、牡丹之富貴三者、而後可以盡其神也、余

しめば、西施應に須く禁闈を出ださるべし」と寛永中に
 及び、石川丈山垂櫻の詩あり云く、「一樹千絲二丈長し、繁
 英袅娜として幽香を發す、此花若し唐園の裏に在らば、
 何ぞ楊妃をして海棠に比せしめん」と、後、明の宋景濂が
 集を閱するに、絶句あり云く、櫻を賞すること日本は唐
 よりも盛なり、彼の牡丹と海棠との如し、恐くは是れ趙
 昌が畫き難き所、春風纔に起りて雪、香を吹くと、近世
 閩の僧道本來りて我が長崎に住す、亦作あり云く、「東來
 初めて見る此花の奇なるを、限りなき春叢白眉を讓る、
 的皜たる嶺珠三百斛、玲瓏たる玉樹萬千枝、何ぞ妨けん
 穩李春に先ちて豔なるに、寒梅の與に雪姿を遜らず、
 若し姮娥宮裏に種えしめば、清光は桂の開く時よりも多
 からん」と、此外聞ゆる無し、故に中野素堂句あり云く、
 「吟人何事か尤疎漏、許の如き名花に久く詩を欠くと、源
 栲亭、太田玩鷗諸人の如き、各其詩あれども、亦未だ
 稱するに足らず、唯柏舒亭絶句獨佳なり」と云く、芳根許さ
 ず西土に傳ふるとを、留めて東方第一の花と作す、大抵
 櫻を咏する、梅花の清、海棠の豔、牡丹の富貴の三者を
 併せ、而して後以て其神を盡す可し、余亦七律五首あり、

亦有七律五首、如其聯云「千重積雪無知暖、一様輕雲易得風、地雖西土應無異、天在東方似有私、天質還宜當曉看、風姿不必隔流評、九錫不加因至貴、五宜何敵此真香、水第川莊微雨後、山龕野廟淡烟中、自以爲不愧古人矣。

又有彼岸櫻者、花不甚大、開以彼岸節、因以得名、本邦、春秋分前後各七日爲彼岸節、丈山詩云、櫻稱彼岸遍山村、恨不入名園、所尊子細看來有三絕、早開無葉著花繁、辻山松亦有五律二首、聯云、細看如異品、更覺勝真櫻、顏色殘霞晚、精神新月晴、山松名峯、自幼遊、奚疑藝、與余同門、詩則從余而學、

舒亭名昶、字永日、有木工集、行于世、最長絕

其聯「千重」積雪暖を知ること無く、一様の輕雲風を得易し「西土」と雖應に異ると無かるべし、天東方に在りて私あるに似たり、「天質還て宜く曉に當りて看るべし、風姿必しも流を隔て、評せず」「九錫加へざるは至貴に因る、五宜何ぞ敵せん此真香」「水第川莊微雨の後、山龕野廟淡烟の中」と云ふが如き、自ら以爲へらく古人に愧ぢずと。

又彼岸櫻なる者あり、花甚大ならず開くに彼岸の節を以てす、因て以て名を得たり、本邦、春秋分前後各七日を調ひて、彼岸の節と爲、丈山が詩に云く「櫻、彼岸と稱し山村に遍し、恨くは名園に入りて尊ばれざることを子細に看來れば三絶あり、早く開き葉なくして花を著ること繁なり」と、辻山松も亦五律二首あり、聯に云く「細に看れば異品の如く、更に覺ふ眞の櫻に勝れるを、顏色殘霞の晚精神新月の晴」、山松は名は峯、幼より奚疑藝に遊ぶ、余と門を同うす、詩は則余に從ふて學ぶ。

舒亭、名は昶、字は永日、木工集あり、世に行はる、最長絶句に

句、嘗作吉原詞三十首、今節數首云、舞閣歌樓連翠、葦夜闌無處不春情、誰知戶外秋風滿、明月橋頭擣紙聲、相思欲寄恨重重、永夜裁書和淚封、影暗銀缸玉蟲冷、風傳淺草寺中鐘、綢繆幾日雨留郎、占盡鴛鴦被裡香、小妹不知離別苦、籬前故掛掃晴娘、又洗竹云、階前減翠延風月、且喜漁竿剩幾枝、記得去年端午後、扶君醉向晚涼移、訪人云、桃花三月趁鶯啼、不訪桃花訪柳栖、風送湖頭波漾漾、夕陽樓在櫓聲西、七言佳句云、往年句少今年句、近日愁多昔日愁、遠因索句難拋枕、且爲留香不捲簾、五言云、雨自江爲脚、雲還石作根、孤舟一蓑雨、匹馬四蹄花、近日人傳山村一絕云、霜落山村樹欲空、朝寒煮菜坐

長ず、嘗て吉原詞三十首を作る、今數首を節す、云く「舞閣歌樓、翠葦に連る、夜闌にして處として春情ならざる」となし、誰か知らん戶外秋風の滿るを明月橋頭紙を擣つ聲「相思寄せんと欲して恨重々、永夜書を裁して涙に和して封す、影銀缸に暗ふして玉蟲冷也、風は傳ふ淺草寺中の鐘「綢繆幾日か雨に郎を留む、占め盡す鴛鴦被裡の香、小妹は知らず離別の苦なるを、籬前故に掛く掃晴娘」、又竹を洗かすに云く「階前翠を減して風月を延く、且喜ぶ漁竿幾枝を剩すを、記得す去年端午の後、君が醉を扶けて晚涼に向つて移せしことを」人を訪ふに云く「桃花三月鶯啼を趁ふ、桃花を訪はず柳栖を訪ふ、風は湖頭を送りて波漾々、夕陽樓は櫓聲の西に在り」七言佳句に云、「往年の句は今年の句よりも少く、近日の愁は昔日の愁よりも多し」遠て句を索るに因て枕を抛ち難く、且香を留むる爲に簾を捲かず」五言に云「雨は自江を脚と爲し、雲は還て石を根と作す」孤舟一蓑の雨、匹馬四蹄の花、近日、人、山村の一絶を傳ふ、云く、「霜落て山村樹空から

爐紅、紺珠已摘、殘茄盡、一尺琅玕剪、早葱、奇
峭殊太甚。

素堂、名正興、字子興、伊勢人、詩喜、放翁、秋日
山行云、緩步唯隨幽意加、山中不管日西斜、
林邊葉墜看無路、谷口鷄鳴知有家、水入澄
潭、初靜、雲歸遠岫、嶺猶餘、煙嵐在在濃、兼
淡、蒸出長天一抹霞、富士川云、天下急流橫
嶽陽、時時怒漲、絕舟航、纔消八頂寸餘雪、水
長、洪川一丈強、他如、人海風波何日定、世途
陵谷、覽時移、園中鋤草香襲袖、林畔伐薪花
滿頭、煙昇樹杪、家何在、鳥下篷窓、人定無、皆
佳、余乙卯之歲、到伊勢、素堂携余遊一乘山
寺、寺在神山之巔、屈曲盤折而上者數百步、
中間有巖石、刻東厓先生之詩、以擬磨崖碑、

詩聖堂詩話

んと欲す、朝寒茶を煮て爐紅に坐す、紺珠已に残茄を摘
み盡して、一尺の琅玕早葱を剪る、奇峭殊に太甚し。

素堂名は正興、字は子興、伊勢の人、詩、放翁を喜ぶ、秋日山
行に云、緩步唯幽意の加ふるに随ひ、山中管せず、日
に斜なるに、林邊葉墜て看るに路なく、谷口鷄鳴て家有
ることを知る、水、澄潭に入りて、初て靜に、雲、遠岫に歸
りて、嶺猶餘かなり、煙嵐在々濃と淡蒸し出す、長天一抹
の霞、富士川に云、天下の急流嶽陽に横はる、時々怒漲舟
航を絶す、纔に八頂寸餘の雪を消し、水は洪川に長す、一
丈強、他、人海の風波何れの日か定まらん、世途の陵谷、覽
時に移る、園中草を鋤けば香、袖を襲ひ、林畔薪を伐れば
花頭に滿つ、煙、樹杪に昇りて、家何くにか在る、鳥下、篷窓
に下りて、人定めて無し、の如き皆佳なり、余乙卯の歲、伊
勢に到る、素堂金を携へて一乘山寺に遊ぶ、寺は神山
の巔に在り、屈曲盤折して上る者數百步、中間に巖石あり、
東厓先生の詩を刻す、以て磨崖碑に擬す、又上ること
數十歩にして之れを望めば、複道重閣、松樹の間に參差

又上數十步而望之、複道重閣、參差乎松樹之間、信一場淨域、無半點俗塵之氣、既而入門、則簪痕滿庭、不見一屐之跡、院院間寂若無人、然素堂行且誦曰、院靜似無僧、余偶然和之曰、門開如有客、素堂甚善、余句曰、勝夜深有雨之對也、遠矣、余亦竊以爲得、僧院莊嚴之象矣、歸後足之爲一律、以紀其事、載在集中、今不贅焉、又導余詣太神宮、余有詩云、欲知神統長無極、開闢以來唯一王、素堂亦有七律一首、聯云、堯宮自古茅茨窄、禹食於今粗糲傳、茅茨粗糲紀其實事、能用古典者也、余每與素堂談詩、必及亡友天水、天水、姓山中、名恕之、亦伊勢人、來江戶、從北山先生而學、年三十三而卒、有晴霞亭遺稿、五言云、

六

たり、信に一場の淨域、半點俗塵の氣なし、既にして門に入る時は、則簪痕滿庭、一屐の跡を見ず、院々闐寂として人無きが若く然り、素堂行且誦して曰、院靜にして僧無きに似たり、余偶然之れに和して曰、門開いて客あるが如し、素堂甚余が句を善して、曰、夜深く雨あるの對に勝れるや、遠しと、余亦竊に以爲ふ、僧院莊嚴の象を得たりと、歸後之れに足して一律と爲し、以て其事を紀す、載せて集中に在り、今贅せず、又余を導ひて太神宮に詣る、余詩あり云、神統の長く極りなきことを知らんと欲せば、開闢以來唯一王、素堂も亦七律一首あり、聯に云、堯宮古より茅茨窄く、禹食、今に於て粗糲傳ふ、茅茨粗糲其實事を紀す、能く古典を用ふる者なり、余素堂と詩を談する毎に、必亡友天水に及ぶ、天水姓は山中、名は恕之、亦伊勢の人、江戶に來りて北山先生に從ふて學ぶ、年三十三にして卒す、晴霞亭遺稿有り、五言に云、月落ちて花に影なく、夜深くして水に聲あり、陳廉夜月に垂る、瀬戸春霞に鎖さす、七言に云、柴門暮ること早し、重々の樹、漁村

月落花無影、夜深水有聲、疎簾垂、夜月、頽戶鎖、春霞、七言云、柴門暮早重重樹、漁舸歸遲曲曲溪、一蹊花落鳥啼少、三面山高月上遲、皆佳句、又有角巾著得林中去、人道七賢欠六圖之句、以故世多毀其險奇過當、余嘗有言曰、亡友天水之詩、有佳句而無佳詩、柏舒亭之詩、有佳詩而無佳句、然佳句易得、而佳詩難得、豈不以舒亭爲勝乎。

山本北山先生文章博學爲海內一人、嘗題關雲長千里獨行圖云、捲雲千里青龍動、嘯月重關赤兔馳、又題舒亭所居云、因洗遮風竹、得添煎茗薪、次韻大場玉泉登富士山云、開關之前造化工、貯雲留雪四時同、要知富士山奇絕、都在玉泉詩句中、元享年間僞詩

歸ること遅し曲々の溪、一蹊花落ちて鳥の啼くこと少れに、三面山高くして月の上ること遅し、皆佳句なり、又「角巾著け得て林中に去らば、人は道はん七賢六を欠く」との句あり、故を以て世多く其險奇過當なるを毀る、余嘗て言へることあり曰、亡友天水の詩は、佳句ありて而して佳詩なし、柏舒亭の詩は、佳詩ありて而して佳句なしと、然れども佳句は得易くして、而して佳詩は得難し、豈舒亭を以て勝れりとせざらんや。

山本北山先生文章博學海内の一人と爲す、嘗て關雲長が千里獨行の圖に題して云、雲を捲きて千里青龍動き、月に嘯きて重關赤兔馳す、又舒亭が所居に題して云、風を遮る竹を洗すに因て、茗を煎るの薪を添ゆることを得たり、大場玉泉が富士山に登るに次韻して云、開關の前造化の工、雲を貯へ雪を留めて四時同じ、富士山の奇絶を知らんと要せば、都在玉泉詩句の中に在り、元享年

之徒流毒一世及先生出首唱中郎之清新排擊李王之腐調蓋所謂用大承氣湯也近日詩風大改先生之功居多然詩非其所自任故出其門者如雨森牙卿太田錦城鷹野魯屋坂井子衷輩非謂不能詩也難以詩人目也以詩人自許者獨素堂與余耳。

余初作詩獨立無倚後因高蒙士得入寬齋先生江湖社與舒亭梅外蟻齋娛菴伯美諸人交又及中野素堂之將刻晴霞亭遺稿也引余謁北山先生余之受知於先生職詩之由距今十餘年有卜居集二卷皆前是所作癸丑之歲因人勸上梓至今噬臍不及也。

鷹野魯屋名實字忠人嘗序余刻詩募疏云柳坵詩中之如來也將濟度一切衆生盡至

間爲詩の徒毒を一世に流す先生出るに及んで中郎が清新を首唱して李王之腐調を排撃す蓋謂はゆる大承氣湯を用ふるなり近日詩風の大に改まる先生の功多きに居る然れども詩は其自ら任する所に非ず故に其門に出る者雨森牙卿太田錦城鷹野魯屋坂井子衷が輩の如き詩を能せずと謂には非ざるも詩人を以て目し難し詩人を以て自ら許す者は獨素堂と余とのみ。

余初め詩を作るに獨立して倚ることなし後高蒙士に因て寬齋先生の江湖社に入り舒亭梅外蟻齋娛菴伯美の諸人と交ふことを得たり又中野素堂が將さに晴霞亭遺稿を刻せんとするに及んで余を引て北山先生に謁せしむ余が知を先生に受る職として詩に之れ由る今を距ること十餘年卜居集二卷あり皆是より前に作る所癸丑の歲人の勸めに因り梓に上す今に至りて臍を噬めども及ばず。

鷹野魯屋名は實字は忠人嘗て余が刻詩募疏に序して云柳坵は詩中の如來なり將さに一切衆生を濟度して盡く佛向上地に至らしめんとす其著す所の卜居集二

佛向上地也、其所著卜居集二卷、欲上梓久矣、諸檀越若出若干金、以助剞劂之費、公之于天下、則其爲功德也必大矣、云云、余咲曰、如來不得濟度衆生、卻濟度於衆生。

三絃之盛于今日、教坊分派、月出新譜、愈出愈淫、其陷溺人心、不啻桑間濮上之音也、余嘗有咏三絃七律云、風翻意海春波亂、雨捲心雲秋月陰、言其惑人心也、甚矣世人之好淫樂也、都下工商固無論、至于士人大夫、凡生女者、則必教之以三絃、習以爲常、不知鑽穴踰牆之患、皆自此中生、寬齋先生亦有三絃彈一首、摘句云、君不見魯國君相受女樂、宣尼拂衣去不還、何使陰陽變理權、移在女兒手口間、蓋傷其壞風俗也、篇章甚長、此不

卷、梓に上さんと欲すること久し、諸檀越若し若干金を出して以て剞劂の費を助け、之れを天下に公にせば、則其功德たるや必大ならんと云云、余咲つて曰、如來、衆生を濟度することを得ず、卻て衆生に濟度せらるると。

三絃の今日に盛なる教坊派を分ち、月に新譜を出たす、愈、出て愈、淫、其人心を陷溺する營、に桑間濮上の音のみにあらず、余嘗て三絃を咏する七律あり、云、風は意海を翻して春波亂れ、雨は心雲を捲て秋月陰る、其人心を惑すを言ふなり、甚しいかな世人の淫樂を好むや、都下工商は固より論なし、士人大夫に至るまで、凡、女を生む者は則必之に教ゆるに三絃を以し、習て以て常と爲す、知らず鑽穴踰牆の患、皆此の中より生することを寬齋先生も亦三絃彈一首あり、摘句に云、君見すや魯國の君相女樂を受く、宣尼衣を拂て去て還らず、何ぞ陰陽變理の權をして、移して女兒手口の間に在らしむるや」と、蓋、其風俗を壞るを傷むなり、篇章甚長し、此に具に錄せず。

具錄。

河寬齋先生爲一代詩匠、與其盟者、如舒亭、梅外、伯美、嫺菴、皆各成一家、海樓齋序先生百絕云、江湖詩社得人於斯爲盛、如先生題東坡遊赤壁圖云、孤舟月上水雲長、崖樹秋寒古戰場、一自風流屬坡老、功名不復畫周郎、可謂絕調、又余瘦梅庵小集賦新燕云、銜泥燕子非生面、底事窺人未到巢、果爾去年秋社後、南頭架屋插新茅、秋日云、風冷多癯身早感、水寒將落齒先知、秋夜云、月沈高樹鴉初睡、菓落閑庭蟲息聲。

寬齋先生嘗論詩云、詩本風情、不求之風趣、而求之格調、抑遠矣哉、且格猶人品、品分上下、士農工商各有身分、有品格、臣而爲君、農

河寬齋先生は一代の詩匠たり、其盟に與る者、舒亭、梅外、伯美、嫺菴が輩の如き、皆各一家を成す、海樓齋先生の百絶に序して云、江湖詩社人を得る斯に於て盛なりと爲す、と、先生東坡が赤壁に遊ぶ圖に題して「孤舟月上りて水雲長し、崖樹秋寒し古戰場、一たび風流、坡老に屬せし自り、功名、復、周郎を畫かず」と云ふが如き、絶調と謂ふ可し、又余が瘦梅庵の小集に新燕を賦して云「泥を銜む燕子生面に非ず、底事、人を窺ふて未だ巢に到らざる、果して爾り去年秋社の後、南頭屋を架して新茅を挿む、」秋日に云、風冷にして多癯の身は早く感じ、水寒して將に落ちんとす、齒先づ知る、秋夜に云、月、高樹に沈んで鴉初めて睡り、菓、閑庭に落ちて蟲聲を息む。

寬齋先生嘗て詩を論じて云、詩は風情に本づく、之れを風趣に求めずして、而して之れを格調に求む、抑遠いかな、且格は猶、人品のごとし、品、上下を分つ、士農工商、各、身分あり、品格あり、臣にして君を爲し、農にして士を爲

而爲士、謂之不知分、故應制試帖、吾所不爲、何則身在江湖也、從軍塞下、吾所不作、何則時際昇平也、夫敦自脩身、始而充之天下、學詩亦爾、言其身分之中、無所不能、然後應制從軍、從所遇、而皆不出於吾身分之外、故學詩、一求之目前、不必求之遠、先生此言、痛中今人之病、故錄于此。

明和之末、謾園餘焰未盡、詩人動率以格調、寬齋先生作北里歌三十首、以見性靈之詩、莫不可言者、舒亭吉原詞、娛菴深川竹枝、皆是其所權輿也、而先生隱其名不著、余謂孔子刪詩、而存鄭衛、雖是豔詞、亦足以記風俗耳、其詞云、畫壁當中燃燭龍、紅彩羅列玉芙蓉、銀壺纔點二更漏、早報東山半夜鐘、桃花

す、之れを分を知らずと謂ふ、故に應制試帖は吾爲ざる所何となれば則身江湖に在ればなり、從軍塞下は吾作らざる所何となれば則時昇平に際すればなり、夫れ敦は修身より始り、而して之れを天下に充つ、詩を學ぶも亦爾り、其身分の中を言ふて、能せざる所なくして、然して後、應制從軍、遇ふ所に從ふて、皆吾身分の外に出でず、故に詩を學ぶには、一に之れを目前に求めて、必しも之れを遠きに求めずと、先生の此の言、痛く今人の病に中る、故に此に録す。

明和の末、謾園の餘焰未だ盡きず、詩人動すれば率するに格調を以ず、寬齋先生、北里歌三十首を作り、以て性靈の詩言ふ可からざる者なきを見はす、舒亭が吉原詞、娛菴が深川竹枝、皆是れ其の權輿する所なり、而れども先生其名を隠くして著さず、余謂へらく孔子詩を刪り而して鄭衛を存す、是れ豔詞と雖亦以て風俗を記するに足らんのみ、其詞に云、畫壁當中燭龍を燃す、紅彩羅列す玉芙蓉、銀壺纔に點す二更の漏、早く報す東山半夜の鐘、桃花敢て天台を隔てず、前庭の劉郎今復來る、阿監錦兒齊

不敢隔天台、前度劉郎今復來、阿監錦兒齊
勸酒、金鼈捧出小蓬萊、日出三竿捲翠帷、宿
粧殘粉亦多姿、嬌鬢未斂朝雲影、一響金鈴
報午時、曉雲窓外雪漫漫、留得郎君歸思寬
撥卻紅泥爐底火、更溫卯酒護朝寒。

池嫖菴、名桐孫、字無絃、有深川竹枝詞三十
首、余閱帶經堂詩話、王漁洋曰、柳枝專咏柳、
竹枝泛咏風土、竹枝詞古人有專咏竹枝、乃
引柳枝之例、然偶一見耳、非原旨也、又讀袁
倉山隨園詩話、有虎邱竹枝、西湖竹枝、秦淮
竹枝、珠江竹枝、虹橋竹枝、湖州竹枝、江上竹
枝、元夜竹枝等、皆紀其風俗也、嫖菴嘗住深
川、故有此撰、其詞云、一隊新粧上畫樓、大娘
押尾小前頭、只因座客多生面、相竝無言自

く酒を勤む、金鼈捧け出だす小蓬萊、「日出でて三竿翠帷
を捲く、宿粧殘粉亦多姿、嬌鬢未だ朝雲の影を歎めざる
に、一響の金鈴午時を報す、「曉雲窓外雪漫漫、郎君を留め
得て歸思寛からしむ、紅泥爐底の火を撥却して、更に卯
酒を温めて朝寒を護す。

池嫖菴、名は桐孫、字は無絃、深川竹枝の詞三十首あり、余
帶經堂詩話を閲するに、王漁洋曰、柳枝は專、柳を咏じ、竹
枝は泛く風土を咏す、竹枝の詞、古人專、竹枝を咏するあ
り、乃、柳枝の例を引く、然れども偶々一見のみ、原旨に非
ずと、又袁倉山が隨園詩話を讀むに、虎邱竹枝、西湖竹枝、
秦淮竹枝、珠江竹枝、虹橋竹枝、湖州竹枝、江上竹枝、元夜
竹枝等あり、皆其風俗を紀るすなり、嫖菴嘗て深川に住
す、故に此撰あり、其詞に云、「一隊新粧畫樓に上る、大娘
は押尾小は前頭、只座客の生面多きに因て、相竝んで言
なく自ら羞るに似たり、「繁絃嬌曲仙舟を送る、信せず人
間自ら愁あるを、却て回る時に到りて轉、惆悵す、子規啼

似羞、繁絃嬌曲送仙舟、不信人間自有愁、卻
 到同時轉惆悵、子規啼過海雲稠、一帶暮江
 烟色濃、來舟時與去舟逢、隔簾髣髴難看面、
 才認語聲輕喚、轉午粉樓粧未勻、前宵猶
 酒翠娥顰、外頭忽喚儂家出、試問生人是熟
 人、銀盤解下綠鬟頭、一朵嬌雲碎不收、爲是
 兒郎催得緊、淡粧漫縮急登樓、風緊蘆邊涼
 似秋、小姑娘學釣在船頭、玉纖未慣擡竿速、只
 道癡魚不上釣、良辰神會正中秋、戶戶珠簾
 盡上鉤、閑卻清光今夜月、星球萬點照街頭、
 重屏隔斷幾鴛鴦、樓鎖春雲夢一場、別有秋
 情卿不解、漁篝月冷滿天霜、額畫濃娥鬢縮
 烏紅粧、航綺逐歡娛、相逢總道青春好、孰識
 羅敷自有夫、命薄新從北里移、紅表只自向

詩聖定詩話

き過ぎて海雲稠し、「一帶の暮江烟色濃なり、來舟時に去
 舟と逢ふ、簾を隔て、髣髴として面を看難し、才に語聲
 を認めて儂を輕喚す、「轉午粉樓粧未だ勻はず、前宵酒に
 髣髴られて翠娥顰す、外頭忽ち儂家を喚び出す、試に問ふ
 生人か熟人かと、「銀盤解下す綠鬟頭、一朵の嬌雲碎け
 て收まらず、是れ兒郎の催し得るの緊きが爲に、淡粧漫
 縮して急に樓に登る、「風緊して蘆邊涼、秋に似たり、小姑
 釣を學んで船頭に在り、玉纖未だ慣はず竿を擡ぐるの速
 なるに、只道ふ癡魚釣に上らずと、「良辰神會正に中秋戸
 々の珠簾盡く鉤に上す、清光今夜の月を閑却して、星球
 萬點街頭を照す、「重屏隔斷す幾鴛鴦、樓は春雲に鎖す夢
 一場、別に秋情あり卿解せず、漁篝月冷なり滿天の霜、
 「額に濃娥を畫て髻に烏を縮す、紅粧航綺歡娛を逐ふ、相
 逢ふて總て道ふ青春好しと、孰れか識らん羅敷。自と
 夫あるを「命薄ふして新に北里より移る、紅の表へたる
 は只自ら鸞に向ふて知る、眉心鬢樣粧ひ成して是なり

鸞知眉心鬢樣粧成是、猶恐人看認舊時、江上人家重女兒、苧蘿自解出西施、垂髻先已教歌曲、等候登場初試時。

我邦有稱卯花者、開以四月初、灌佛前日、都下之俗、賣此花及新茗、爲其供佛也、娯菴首夏云、春事闌珊不住些、雨餘濃葉護窓紗、兩竿紅日眠初醒、聽取門前賣卯花、卯花入詩、娯菴爲始。

島梅外、名筠、字稚節、所見云、低細箏聲、彈娯風、小庭烟淡、月朦朧、青簾半捲、燈不點、人在海棠花影中、夜景云、無數鳧鷗泊、月明、柔櫓啣、夜漁行、驚飛不遠一齊去、過箇蘆叢、落水聲、可謂流麗矣、梅外作詩、每出新裁、然性疎放、動有平仄失粘者、余每讀梅外詩、必先

猶恐る人の看て舊時を認めんことを、江上の人家女兒を重んず苧蘿自ら解す西施を出だすことを、垂髻先已に歌曲を教へ、場に登りて初て試むる時を等候す。

我邦、卯花と稱する者あり、開くに四月初を以てす、灌佛の前日、都下の俗、此花及び新茗を賣る、其佛に供するが爲めなり、娯菴、首夏に云、春事闌珊として些を住めず、雨餘の濃葉窓紗を護す、兩竿の紅日眠初て醒む、聽取す門前卯花を賣るを、卯花の詩に入るは娯菴を始とす。

島梅外、名は筠、字は稚節、所見に云、低細の箏聲、風に彈ず、小庭烟淡くして、月朦朧、青簾半卷きて、燈點せず、人は海棠花影の中に在り、夜景に云、無數の鳧鷗、月明に泊す、柔櫓啣、とし夜漁行、驚飛遠からず一齊に去る箇の蘆叢を過ぐるに、水に落つる聲あり、流麗と謂ふ可し、梅外詩を作る、毎に新裁を出だす、然れども性疎放、動もすれば平仄失粘する者あり、余梅外が詩を讀む毎に、必先づ

正其失聲、故梅外苦余嚴酷、余豈嚴酷乎哉、
梅外之疎漏也。

陳簡齋柳絮詩云、顛狂還作高千尺、風力微
時穩下來、梅外傲其意、咏蒲公英云、欲落還
颺二三尺、風微緩渡野流來、能得點化之妙、
余亦嘗反唐人鷺詩、一樹梨花落晚風之意、
以咏棣棠花云、幾雙黃蝶落風前。

咏物之體最難、切則泥、離則粗、不泥不粗、方
初稱妙、辻山松咏芭蕉云、半天殘雨雷初罷、
滿扇驟涼風乍來、若林伯節咏海棠云、月下
多情春有睡、風前遺恨舊無香、皆得其妙。

二老堂雜誌云、關皂山館有「天福四年、孫偃
李洞、宋齊邱、沈彬、孟賓于、徐鉉、陶淵詩碑、是
詩碑之始也、又有詩塚之目、見宋景濂集云、

其失聲を正す、故に梅外余が嚴酷に苦む、余、豈嚴酷なら
んや、梅外が疎漏なるなり。

陳簡齋が柳絮の詩に云、顛狂還て高き千尺を作し、風力
微なる時穩に下り来る、梅外其意に傲ふて蒲公英を咏
じて云、落ちんと欲して還た颺る二三尺、風微にして緩
く野流を渡り来る、能く點化の妙を得たり、余亦嘗て唐
人の鷺の詩「一時の梨花晚風に落つ」の意を反して、以て
棣棠花を咏して云、幾雙の黄蝶か風前に落つと。

咏物の體最難し、切なれば則ち泥み、離れば則ち粗なり、
泥まず粗ならず、方に初めて妙と稱す、辻山松、芭蕉を咏
して云、半天の殘雨雷初めて罷み、滿扇の驟涼風乍來
る、若林伯節、海棠を咏して云、月下多情、春睡るあり、風
前の遺恨舊より香なし、皆其妙を得たり。

二老堂雜誌に云、關皂山館に「天福四年、孫偃、李洞、宋齊
邱、沈彬、孟賓于、徐鉉、陶淵の詩碑あり、是詩碑の始めな
り、又詩塚の目あり、宋景濂が集に見の、云、番に奇男子あ

番有奇男子曰魯脩、學詩李存先生、先生以文雄江東、獨才脩、脩有詩朋十人、皆緣情善賦、番數羅兵燹、脩懼其詩失傳、塹爲堊、刻瘞之芝山中、我邦未聞有此等事、嘗伯美嘗立詩碑於暨止平林寺中、又刻般若心經瘞之名曰瘞心經、其好尙可想、伯美名清成、高崎世臣有松夢軒集八卷、詩專學香山、故其所言多涉平淡、謫居云、「一水淙淙繞屋流、通宵徹枕惹閑愁、思如忙蝶狂來倦、身似飢蠶食罷休、林外聽鐘知寺近、窓前聞鹿覺鄉幽、關情此際都拋卻、欲學無生息所求、秋懷云、月依堦、賞深侵夜、日爲易、消偏愛秋、五言云、不覺來遊寺、無端又出林、山僧總無事、遷客屢來遊。」

り魯脩と曰ふ詩を李存先生に學ぶ、先生文を以て江東に雄たり、獨脩を才とす、脩詩朋十人あり、皆情に緣て善く賦す、番數、兵燹に罹る、脩其詩の傳を失はんことを懼れて、堊を塹して壁と爲し、刻して之れを芝山中に瘞む、我邦未だ此等の事あるを聞かず、嘗伯美、嘗て詩碑を暨止の平林寺中に立て、又般若心經を刻して之れを瘞む名けて瘞心經と曰ふ、其好尙想ふ可し、伯美名は清成、高崎の世臣、松夢軒集八卷あり、詩專、香山を學ぶ、故に言ふ所多く平淡に涉る、謫居に云、「一水淙々として屋を繞りて流る、通宵枕に徹して閑愁を惹く、思は忙蝶の狂し來りて倦むが如く、身は飢蠶の食し罷んで休むに似たり、林外鐘を聽て寺の近きを知り、窓前鹿を聞て郷の幽なるを覺ふ情を關る、此際都て拋却して、無生を學んで求むる所を息めんと欲す、私懷に云、「月は賞するに堪へたるに依りて深く夜を侵し、日は消し易きが爲めに偏に秋を愛す、五言に云、覺えず來りて寺に遊ぶを端なく又林を出づ、山僧總て無事、遷客屢來り遊ぶ。」

詩貴平淡、平淡、詩之上乗也、然平淡不經奇險中來、則徒是村嫗絮談耳、全無氣力焉、故學詩先覓奇險、而後溫雅、而後平淡、詩到平淡而詩之能事畢矣、東坡云、凡爲文當使氣象崢嶸五色絢爛、漸老漸熟、乃造平淡、周少隱云、不但爲文、作詩者亦當取法於此。

海樓齋名璠、字君玉、睡起云、暗窓醒訝日將暮、不識春雲釀、雨催烟斷竹爐灰未冷、睡間猶是半時來、夏日田園云、郊村十里與山連、野雉聲聲碎暮煙、低處秧田高處麥、綠黃劃破小潺湲、又有愛轉牀頭養、苔石、寵寰窓外過花盆之聯、尤佳、璠齋有兄曰森岡世璋、字伯珪、伯珪有子長曰展、字綠天、次曰珊、字貢父、皆善詩、璠齋養貢父以爲己子、丁巳之冬、

詩は平淡を貴ぶ、平淡は詩の上乗なり、然れども平淡は奇險中を經來らざれば、則徒に是村嫗の絮談のみ、全く氣力なし、故に詩を學ぶ、先づ奇險を覓め、而して後に溫雅、而して後に平淡なり、詩平淡に到りて而して詩の能事畢る、東坡云、凡、文を爲る當さに氣象をして崢嶸に、五色絢爛ならしむべし、漸く老い漸く熟して、乃平淡に造ると、周少隱云、但に文を爲るのみならず、詩を作る者も亦當さに法を此に取るべし。

海樓齋名は璠、字は君玉、睡起に云、「暗窓醒て訝る日將さに暮れんとするかと、識らず春雲の雨を釀し催すことを、竹爐に斷えて灰未だ冷ならず、睡間猶是れ半時來、」夏日田園に云、「郊村十里山と連る、野雉聲々暮煙に碎く、低處は松田高處は麥、綠黃劃破す小潺湲、」又、愛は轉す牀頭苔を養ふ石、寵は寰窓外花を過ぐる盆の聯あり、尤佳なり、璠齋兄あり、森岡世璋と曰ふ、字は伯珪、珪珪子あり、長を展字は綠天と曰ひ、次を珊字は貢父と曰ふ、皆詩を善す、璠齋貢父を養ふて、以て己が子と爲す、丁巳の冬、余伊勢より歸る、璠齋亦貢父を攜へて備中より還る、

余歸自伊勢、螻齋亦攜貢父自備中還、不圖相遇薩埵嶺上、余乃有詩云、奇景何圖得奇伴、與山併作一雙奇、螻齋風流好事家多藏奇書。

世有增注聯珠詩格、不載作者姓名、或疑五山僧徒之所作也、頃日得朝鮮本聯珠詩格、末有弘治二年竹溪安琛字子珍者跋云、成化乙巳年間、遼城徐公居正增爲注解、後七年我成宗大王命臣琛及成倪蔡壽權健申從護將徐注重加補削、既獻用鑄字印頒、云云、今本無此跋文、故致人疑爲錄告世、徐居正、申從護、成倪三人、見朱竹地明詩綜。

余自伊勢歸寓山本汎居、綠陰茶寮、庭前有紅梅一樹、比已結實、葉間更發兩三點白花、

圖らず薩埵嶺上に相遇ふ、余乃詩あり、云「奇景何ぞ圖らん、奇伴を得んとは、山と併せて一層の奇と作す」、螻齋風流好事家、に多く奇書を藏す。

世に増注聯珠詩格有、作者の姓名を載せず、或は疑ふ、五山の僧徒の作る所と、頃日朝鮮本の聯珠詩格を得たり、末に弘治二年竹溪安琛字は子珍といふ者の跋あり、云、成化乙巳年間、遼城の徐公居正、増して注解を爲る、後七年、我成宗大王、臣琛及成倪、蔡壽、權健、申從護に命じ、重て補削を加へしむ、既に獻じて鑄字を用ひ、印頒すと云云、今本、此跋文なし、故に人の疑を致す、爲に錄して世に告ぐ、徐居正、申從護、成倪三人、朱竹地の明詩綜に見えたり。

余伊勢より歸りて山本汎居が綠陰茶寮に寓す、庭前紅梅一樹あり、已に實を結ぶ比ほひに、葉間更に兩三點の白花を發す、余詩あり、云「穠國夫人玉を肌と作す、誤りて時

余有詩云、魏國夫人玉作肌、誤隨時世競妍
 嬾、又猜新様不相稱、偷卸紅粧試舊姿、詩成、
 以似北山先生、先生曰、魏國淫行女子、不可
 以比梅花清白、余退而告汎居曰、先生起、一
 大議論以論詩、此則先生之所以爲先生也、
 汎居名謹、字公行、北山先生適嗣也、少余十
 歲、交最相親、其聞蛙、有斷續聲中種種聲之
 句、奇警可喜、又晚秋云、天氣慘淒霜下緊、衆
 林染盡到秋過、小齋簾捲輕風入、午睡枕邊
 紅葉多、汎居每月集、北阜櫻宇、延年、天來童
 堂、山松顯臣、共懿諸人、分韻賦詩、必推余執
 牛耳、汎居固多詩材、我望其愈、老愈熟愈到
 其妙。

櫻宇、春日晏起、有暖被醒來初轉枕、滿窓花

世に隨ひて妍嬾を競ふ、又猜ふ新様の相稱はざるを、偷に紅粧を卸して舊姿を試む、と詩成る、以て北山先生に似す、先生曰、魏國は淫行の女子以て梅花の清白に比す可からずと、余退きて汎居に告げて曰、先生、一大議論を起して以て詩を論ず、此れ則ち先生の先生たる所以なりと

汎居名は謹、字は公行、北山先生の適嗣なり、余より少きこと十歲、交最相親し、其蛙を聞くに、斷續聲中種々の聲の句あり、奇警喜ぶ可し、又晚秋に云、天氣慘淒霜の下ること緊し、衆林染め盡して秋の過るに到る、小齋簾捲て輕風入る、午睡枕邊紅葉多し、汎居、毎月、北阜、櫻宇、延年、天來童堂、山松、顯臣、共懿の諸人を集めて韻を分ち詩を賦す、必余を推して牛耳を執らしむ、汎居固より詩材多し、我れ其愈、老いて愈、其妙に到らんことを望む。

櫻宇、春日晏起に、暖被醒め來りて初て枕を轉すれば、滿

影午鷄聲之句、七言移居云、從移閑地詩多瘦、自買好山、家倍貧、五言云、斜日孤村雨、殘虹半野晴、看梅云、雪暗初晴後、月奇將曙前、皆佳句也、櫻宇姓山田、名直大、字伯方。

延年、姓松井、名壽、梨花云、夢中相遇林之下、玉骨美人雲作裳、洗盡嬌顏、雨晴夕、更臨月鏡、試新粧。

天來、姓與住、名時雨、秋晚云、半庭斜日雨初晴、雨後秋風驟冷生、白帝明朝欲回、駕赤衣使者啓前行、秋日云、昨來知道微霜下、染得楓梢第一枝、只恐金魚不堪冷、取來破笠覆盆池、天來學詩未一年、已有此手段、所謂近於詩者也。

董堂、名敬義、字伯直、以書名世、書學董玄宰、

窓の花影午鷄の聲の句あり、七言移居に云、閑地に移りしより詩多くは瘦せ、好山を買ひしより家倍貧、五言に云、斜日孤村の雨、殘虹半野の晴、梅を見るに云、雪は暗し初めて晴る後、月は奇なり將に曙けんとする前、皆佳句なり、櫻宇姓は山田、名は直大、字は伯方。

延年、姓は松井、名は壽、梨花に云、夢中相遇ふ林の下に、玉骨の美人雲を裳と作す、嬌顔を洗ひ盡す雨の晴る夕、更に月鏡に臨んで新粧を試む。

天來、姓は與住、名は時雨、秋晚に云、半庭の斜日雨初めて晴る、雨後の秋風驟冷生す、白帝明朝駕を回さんと欲す、赤衣の使者前行を啓く、秋日に云、昨來知道す微霜の下るを染め得たり、楓梢第一枝、只恐る金魚の冷に堪へざらんを、破笠を取り來りて盆池を覆ふ、天來詩を學ぶ、未だ一年ならず、已に此手段あり、謂ゆる詩に近き者なり。

董堂、名は敬義、字は伯直、書を以て世に名あり、書學董玄

因以爲號、其送中野素堂、有今日送君猶未別、已從今日待君還之語、最爲婉麗、又病中花遲云、二月中旬猶有雪、石爐添火下重帷、春寒不恨約花住、一日開遲落亦遲、酒店云、和風暖日雪消時、遙過溪橋訪酒旗、壁上新題股點檢、春來某某看梅詩、夏日田園云、杜宇聲中欲雨天、村村麥熟小豐年、饜鎌農叟歸來處、一朵黃雲擔在肩、余最愛其山近知秋早、池深得月多之一聯。

島梅外紅葉句云、三日不來秋色老、前回好處已空枝、董堂乃云、前回來此未旬日、岸畔青楓太半丹、語意相同而不妨各佳。

河孔陽、名三亥、寬齋先生之長子也、自七八歲、學米海岳書、及長益極其妙、余常言方今

宰を學ぶ、因て以て號と爲す、其中野素堂を送るに、「今日君を送りて猶未だ別れざるに、已に今日より君が還るを待つ」の語あり、最婉麗たり、又病中花遲きに云、「二月中旬猶雪あり、石爐火を添へて重帷を下す、春寒恨みず花を約し住むるを、一日開くこと遅ければ落るも亦遅し」、酒店に云、「和風暖日雪の消する時、遙に溪橋を過ぎて酒旗を訪ふ、壁上新題股に點檢すれば、春來某某梅を看るの詩」、夏日田園に云、「杜宇聲中雨ならんと欲する、天村々麥熟す小豐年、鎌を腰にする農叟歸り來る處、一朵の黃雲擔ふて肩に在り」、余最其「山近ふして秋を知ること早く、池深ふして月を得ること多し」の一聯を愛す。

島梅外紅葉の句に云、「三日來らず秋色老ゆ、前回の好處已に空枝」、董堂は乃云、「前回此に來る未だ旬日ならず、岸畔の青楓太半丹し」、語意相同うして而して各佳なるを妨げず。

河孔陽名は三亥、寬齋先生の長子なり、七八歳より米海岳が書を學び、長するに及び益其妙を極む、余常に言

都下能書者二人、老人則柴栗山、少年則河孔陽、孔陽詩有家風、夏日云、五更過雨曉來晴、夏木如金村景清、一寸青秧三寸水、田田浸得鬧蛙聲。

作詩之人固少也、觀詩之人亦不多也、余每得一詩、則必示之增田董齋、董齋必解頤首肯焉、如董齋、謂能觀詩之友而可也、董齋、名澆、字萬頃、善篆刻、後學詩、詩甚新奇、故寬齋先生贈云、風情更轉雕蟲手、裁出江湖新樣詩、其看梅云、晴溪流淺可三尺、小艇探春次第移、一樹梅花乍橫水、短篙無處避瓊枝、又四月云、山雨晴時繁嫩綠、海雲破處過新鶻、漁郎恰報松魚信、便是鎌倉四月天、松魚以出鎌倉者爲第一、都下賞之、猶如華人之賞

ふ、方今都下書を能する者二人、老人は則柴栗山、少年は則河孔陽、孔陽の詩は家風あり、夏日に云、「五更の過雨曉來晴る、夏木金の如く村景清し、一寸の青秧三寸の水田々浸し得たり鬧蛙の聲。」

詩を作るの人固より少し、詩を觀るの人亦多からず、余一詩を得る毎に、則必之れを増田董齋に示す、董齋必解頤首肯す、董齋の如きは能く詩を觀るの友と謂ふて可なり、董齋名は澆、字は萬頃、篆刻を善す、後、詩を學ぶ詩甚新奇、故に寬齋先生贈りて云、「風情更に雕蟲の手を轉じ、裁し出だす江湖新樣の詩、其、梅を看るに云、「晴溪流淺ふして三尺可、小艇春を探りて次第に移る、一樹の梅花乍水に横はる、短篙瓊枝を避くるに處なし」、又四月に云、「山雨晴るゝ時嫩綠繁し、海雲破るゝ處新鶻過ぐ、漁郎恰報す松魚の信、便ち是れ鎌倉四月の天、松魚、鎌倉に出づる者を以て第一と爲す、都下之れを賞すること、猶、華人の蟹を賞するが如し、其初て出るや、或は劔を賣り

蟹螯也、其初出也、至或賣劍典衣以爭之、柏舒亭所謂欲解新衣、當新味、朝暾窓外賣松魚、亦謂此也。

十日之苦心、要在得一字半句矣、當其已得之、知古作某字某語之初、若爲其句其詩而作者、譬如疎影暗香字、一落林君復之手、而千載咏梅者不可復侵也、是謂辭有主、我黨作詩、宜相爲避之。

詩莫不可解也、而其有不可解、則非天下至公之不可解、唯我一己之不可解也、世人動以妙處在可解、不可解之間之一語、率之誤矣、余咏櫻草七律、有惜將五色染雲手、卻換千枝戴雪姿、之語、麓谷老人觀曰、此句不可解、余默然、爾後遇人必舉此問之、衆皆曰、可

衣を典つて以て之れを争ふに至る、柏舒亭が謂ゆる「新衣を解て新味に當てんと欲す、朝暾窓外に松魚を賣ると」亦此れを謂ふなり。

十日の苦心、要一字半句を得るに在り、其已に之れを得るに當りては、知る古某の字某の語を作るの初、其句其詩の爲にして作る者の若し、譬へば疎影暗香の字の如き、一たび林君復が手に落ちて、而して千載、梅を咏する者、復侵す可からず、是れを辭に主ありと謂ふ、我黨の詩を作る、宜く相爲に之れを避くべし。

詩解す可からざるなし、而して其解す可からざるあるは、則天下至公の解す可からざるに非ず、唯我一己の解す可からざるなり、世人動もすれば、妙處は解す可く解す可からざるの間に在るの一語を以て之れを率す、誤れり、余櫻草を咏する七律に「惜らくは五色、雲を染むる手を將て、却て千枝雪を戴く姿に換ふの語あり、麓谷老人觀て曰、此句解すべからずと、余默然たり、爾後人に遇へば必此れを舉げて之を問ふ、衆皆解すべしと曰ふて、

解而後心初安。

麓谷、姓谷、名本脩、畫家文晁之父也、性好詩、年七十餘、聞有詩會、則必造之、分韻賦詩、下筆立成、不必待八、又作詩之速、余未見、如斯者也、麓谷常自云、我有速作之病、是以詩多屬粗硬、然如其云、半夏夏初草、長春春後花、不可謂不巧。

藤榮堂、名博、春雨云、吟社探梅期在近、旗亭問柳約何違、又云、潤花霽柳功非一、渾在霏霏漠漠中、又有花溪鳥浴紅邊水草徑、人衝綠處烟、夕摘畦蔬和雪煮、晨收林葉帶霜燒之句、皆佳也、榮堂之婦曰舜英、麓谷老人之女、文晁之妹也、與其嫂幹幹同工於畫云。

閔秀善詩者、近世唯木端人之妻順姑一人

而して後心初て安し。

麓谷、姓は谷、名は本脩、畫家文晁が父なり、性、詩を好む、年七十餘、詩會あるを聞くとときは、則必之れに造る、韻を分ち、詩を賦す、筆を下せば立ろに成る、必しも八又を待たず、詩を作るの速なる、余未だ斯の如き者を見ず、麓谷常に自ら云、我速に作るの病あり、是を以て詩多く粗硬に屬すと、然れども其、半夏は夏初の草、長春は春後の花と云ふが如き、巧ならずと謂ふ可からず。

藤榮堂、名は博、春雨に云ふ、吟社梅を探る期近きに在り、旗亭柳を問ふ約何ぞ違はん、又云、花を潤ほし柳を霽す功一に非ず、渾て霏々漠々の中に在り、又、花溪鳥は浴す紅邊の水草徑、人は衝く綠處の烟、夕に畦蔬を摘んで雪に和して煮、晨に林葉を收めて霜を帶て燒く、の句あり、皆佳なり、榮堂の婦を舜英と曰ふ、麓谷老人の女、文晁の妹なり、其嫂幹々と同じく畫に工みなりと云ふ。

閔秀の詩を善する者、近世唯木端人が妻順姑一人のみ、島

耳、島梅外將刻其遺稿而收之於雨餘軒叢書、余就梅外得數首、午睡云、春到梨花日漸長、簾前睡靜不添香、輕風吹夢時醒起、雲白窓紗未夕陽、雪後云、碧紗風透攪幽夢、食暖枕衾將起遲、怪底雨聲連打砌、繞檐疎滴雪消時、三月盡云、殘夜惜春眠不成、柔腸斷盡遠鐘聲、暗燈閑把金釵剪、一陣輕寒入五更、夜景云、綠動庭間夜景清、小欄倚徧解殘醒、一痕纖月亂雲外、聽得子規三四聲、春曉云、昨夜庭前風雨過、朝暎紅映碧窓紗、黃鸝百轉眠初醒、獨對海棠看落花。

自古才子少、福分天之賦、命其曷如斯乎、若欲早奪其生、則不如莫始與之才也、若小川笙船之孫藤吉、井金我之孫富藏、皆稱奚疑

詩聖堂詩話

梅外將に其遺稿を刻して之れを雨餘軒叢書に收めんとす、余梅外に就て數首を得たり、午睡に云、「春、梨花に到りて日漸長し、簾前睡靜にして香を添へず、輕風夢を吹いて時に醒めて起く、雲は窓紗に白くして未だ夕陽ならず、雪後に云、「碧紗風透りて幽夢を攪す、暖を食る枕衾將に起きんとすること遲し、怪む雨聲の連りに砌を打つを、檐を繞る疎滴雪の消する時、」三月盡に云、「殘夜、春を惜んで眠成らず、柔腸斷盡す、遠鐘の聲、暗燈閑に金釵を把りて剪る、一陣の輕寒五更に入る、」夜景に云、「綠、庭間に動て夜景消し、小欄倚り徧くして殘醒を解く、一痕の纖月亂雲の外、聽き得たり子規の三四聲、春曉に云、「昨夜庭前風雨過く、朝暎の紅は碧窓紗に映す、黃鸝百轉眠初めて醒む、獨、海棠に對して落花を見る、」

古より才子福分少なし、天の命を賦する其れ曷ぞ斯の如きや、若し早く其生を奪はんと欲せば、則始より之れが才を與ふること莫きに如かず、小川笙船が孫藤吉、井金我が孫富藏が若き、皆奚疑熟の才子と稱せらる、而し

塾之才子、而早世莫傳、悲哉、木偵、字貞人、亦江湖社中一才子也、歲二十二而卒、其江上卽事云、岸葦秋深雨後叢、寒烟散處泊孤篷、清風乍起波搖月、百尺銀龍浴水中、又春曉云、雙屐餘痕半庭藓、夜來知有竊花人。

鈴木聡、字廉夫、川越人、亦早卒、嘗有「酒逢花君且醉、世間開落、暫時中之句、似是其詩識」。

中野惕翁、名正明、字誠甫、素堂之父也、病後試步云、試出衡門外、曳筇烟水鄉、衰殘劍初重、疲瘦帶殊長、徐步遭人訝、閑身憐世忙、唯乘輕暖好、隨意追梅香、能摸寫衰老之狀、其書齋曰乾乾齋、寬政戊午之春、年六十四、讀易有感、有「八卦重成齊我年、之句、後亡、何臥」

て早世して傳ふるなし、悲しいかな、木偵字は貞人も亦江湖社中の一才子なり、歳二十二にして卒す、其江上卽事に云、「岸葦秋深し雨後の叢、寒烟散する處孤篷を泊す、清風乍起りて波、月を搖かす、百尺の銀龍水中に浴す」又春曉に云、「雙屐、痕を餘す半庭の藓、夜來知る花を竊むの人あることを」。

鈴木聡字は廉夫、川越の人、亦早く卒す、嘗て「酒あり花に逢ふ君且く酔へ、世間の開落、暫時の中」の句あり、是れ其詩識に似たり。

中野惕翁、名は正明、字は誠甫、素堂が父なり、病後、歩を試むに云、「試に衡門の外に出で、筇を曳く野水の鄉、衰殘劍初めて重く、疲瘦帶殊に長し、徐歩人に訝かられ、閑身世の忙きを憐む、唯、輕暖の好きに、乘じて、隨意に梅香を追ふ、能く衰老の狀を摸寫す、其書齋を乾々齋と曰ふ、寬政戊午の春、年六十四、易を讀んで感あるに、八卦重ね成して我年に齊し」の句あり、後何くも亡ふして病に臥し

病而不起、六十四卦其數有限、可謂詩讖矣。

六月二十四日爲觀蓮節、我邦未聞有賞此節者、北山先生以此日爲上毛永澤容宇幼公、會同社詩人於東叡山下不忍池、以觀蓮節讀幼公遺稿爲題、一時會者四十餘人、秋田小野華陽有七律一首、後二聯云、能留身後無窮業、宛遇生前未見人、襲袂幽香拂不去、詩魂莫是作花神、嗚呼幼公地下而有知其必稟之矣、比彼禮佛施僧以此爲功德菩提者、則其供養幾何。

稻垣君義、名正方、小諸老侯之庶子、爲其大夫稻垣伯弓之養子、嘗校訂幼公遺稿、君義固非有與幼公知、唯懼其詩散佚、爲之校訂、亡幾君義亦卽世、而其才無顯、余僅記夕日

て起たず、六十四卦其數限あり詩讖と謂ふ可し。

六月二十四日を觀蓮節と爲す、我邦未だ此節を賞する者あることを聞かず、北山先生、此日を以て、上毛、永澤容宇は幼公が爲めに、同社詩人を東叡山下の不忍池に會す、觀蓮節に幼公遺稿を讀むを以て題と爲す、一時會する者四十餘人、秋田の小野華陽、七律一首あり、後二聯に云、能く身後無窮の業を留め、宛として生前未見の人に遇ふ、袂を襲ふ幽香拂へども去らず、詩魂是れ花神と作ることを、莫からんや、嗚呼幼公地下にして知ることあらば、其れ必之れを稟げん、彼の佛を禮し、僧に施し、此れを以て功德菩提と爲す者に比すれば、則供養幾何ぞ。

稻垣君義、名は正芳、小諸老侯の庶子、其大夫稻垣伯弓が養子と爲る、嘗て幼公遺稿を校訂す、君義固より幼公と知ることあるに非ず、唯、其詩の散佚せんことを懼れて、之れが爲めに校訂す、幾くも亡ふして、君義亦世に卽く、而して其才顯るゝ無し、余僅に、夕日暮き、餘す千萬紅の

春餘千萬紅之一句。

飯田共懿、太田文思、爲其亡友高麗松溪、伊藤明行、會都下名士於十條村西園精舍、余時西遊不與焉、北山先生作之序、谷文晁因其境與宋賢集會之地名相暗合、以紺紙金泥、寫李伯時西園雅集圖贈之、亦一時之盛會云。

或毀繡流之詩云、不免蔬筍之氣、余以爲不然、繡流之詩之所以可愛者、以其有蔬筍之氣也、余譬之於花、海棠花也、牡丹花也、李梅桃杏齊皆花也、雖有黃紅紫白之異、要之不過粧點一種之春色耳、繡流之詩、求之於花、則梅也、余愛其字瘦句寒味淡格清也、如釋冷然閑居雜詠云、靈心愛汝移新竹、清格慕

一句を記す。

飯田共懿、太田文思、其亡友高麗松溪、伊藤明行が爲に都下の名士を十條村の西園精舍に會す、余時に西遊して與らず、北山先生之れが序を作る、谷文晁其境宋賢集會の地と名相暗合するに因り、紺紙金泥を以て、李伯時が西園雅集の圖を寫して之れを贈る、亦一時の盛會と云ふ。

或は繡流の詩を毀りて云、蔬筍の氣を免れず、と余以爲へらく然らず、繡流の詩の愛す可き所以の者は、其蔬筍の氣あるを以てなり、余之れを花に譬ふ、海棠も花なり、牡丹も花なり、李梅桃杏齊く皆花なり、黃紅紫白の異ありと雖、之れを要するに一種の春色を粧點するに過ぎざるのみ、繡流の詩、之れを花に求むれば則梅なり、余其字瘦せ句寒く味淡く格清きを愛す、釋の冷然が閑居雜詠に云ふが如き、靈心、汝を愛して新竹を移し、清格君を慕

君栽早梅、保社劉雷之輩士、談玄魏晉以問人、半生卜隱能知足、一事於詩猶未、廉、可謂脫俗韻矣、又有澆花晨汲帶春星、漫興詩篇多斷句之句、亦佳也、冷然詩、余得之淺井觀齋。

余西遊之日、途出信濃、宿小諸稻垣伯弓之家、三四日、城下人士來求詩者數十人、有僧觀禪者、亦來見余、稱歎余詩不凡、因問曰、公在都下、知瘦梅先生乎、余曰、知之矣、和尚何以獨記瘦梅之名、僧曰、瘦竹先生曾遊此地、我得見之矣、我聞都下有瘦竹瘦梅二先生、以詩鳴、一時、余觀公詩、非尋常之人、必二先生之徒、我是以問之、余咲曰、和尚具一隻眼、觀我、瘦梅是我也、僧愕然曰、聞先生之名之

ふて早梅を栽ゆ、社を保す劉雷の輩の士、立を談する魏晉以問の人、半生隱を卜して能く足ることを知り、一事詩に於て猶未だ廉ならず、俗韻を脱すと謂ふ可し、又花に澆ぎ晨に汲みて春星を帶ぶ、漫興の詩篇は多くは斷句の句あり、亦佳なり、冷然が詩余之れを淺井觀齋に得たり。

余、西遊の日、途、信濃に出で、小諸の稻垣伯弓が家に宿すること三四日、城下の人士來りて詩を求むる者數十人、僧觀禪なる者あり、亦來りて余に見ゆ、余が詩の凡ならざるを稱歎して、因て問ふて曰、公、都下に在り、瘦梅先生を知るやと、余曰、之れを知る、和尚何を以て獨、瘦梅が名を記するや、僧曰、瘦竹先生、曾て此地に遊び、我、之れを見るを得たり、我、聞く都下に瘦竹瘦梅の二先生あり、詩を以て一時に鳴ると、余、公の詩を觀るに、尋常の人に非ず、必二先生の徒ならん、我是を以て之れを問ふと、余咲て曰、和尚一隻眼を具へて我れを觀る、瘦梅は是れ我れなりと、僧愕然として曰、先生の名を聞くこと久し、何ぞ圖

久矣、何圖得今日相見、豈不一大因緣乎、乃作詩贈余、有若無瘦竹吟詩瘦、誰與瘦梅同比肩之語、余席間次韻答之云、如今許作詩人否、一箇詩囊擔在肩、瘦竹、柏舒亭之別號也。

余嘗與舒亭開詩社於東江精舍、號曰二瘦詩社、來與盟者百餘人、北山先生作之引、固不受一星之銀、半尺之布、痛斥世之爲李王者、於是格調之徒、豬怒虎視、議論詭譎、不止焉、然由此得人亦不少、世之刺我非我、於吾乎何有。

余以五月半過木曾山中、梅花已落、桃李盛開、余欲作詩、忽憶中野素堂四月猶餘二月花之句、遂止、因謂若改四月爲五月、雖是實

らん今日相見ること得んとは、豈、一大因緣ならずやと、乃詩を作りて余に贈る、若し瘦竹が詩を吟じて瘦たる無くんば、誰か瘦梅と同じく肩を比べん、の語あり、余席間次韻して之れに答ふ、云、如今許して詩人と作さんや否や、一箇の詩囊擔ふて肩に在り」と、瘦竹は、柏舒亭が別號なり。

余嘗て舒亭と詩社を東江精舍に開き、號して二瘦詩社と曰ふ、來りて盟に與る者百餘人、北山先生之れが引を作る、固より一星の銀、半尺の布を受けず、痛く世の李王を罵す者を斥く、是に於て格調の徒、豬のごとく怒り虎のごとく視、議論詭々として止まず、然れども此に由て人を得るも亦少からず、世の我を刺り我を非る、吾れに於てか何んか有らん。

余、五月半を以て木曾山中を過ぐ、梅花已に落ちて桃李盛んに開く、余詩を作らんと欲して、忽、中野素堂が「四月猶餘す二月の花」の句を憶ひ、遂に止む、因て謂ふ、四月を改めて五月と爲せば、是實事と雖詩を成さざるなり、哀

事不成詩也。袁子才云、張若駒五月九日舟中偶成詩、水窓晴掩日光高、河上風寒正長潮、忽忽夢回憶家事、女兒生日是今朝、此詩算是天籟、然把女字換一男字、便不成詩、此中消息口不能言、余深有悟焉。

陸放翁詩云、糶米歸來午未炊、家人竊憫老翁飢、不知弄筆東窓下、正和淵明乞食詩、清人魏懋堂山中積雪云、寂莫山涯又水濱、漫天匝地白如銀、前村報道溪橋斷、可喜難來索債人、皆極盡貧中之趣者也、夫貧之與病人之所惡、而入詩則佳、如絲井翼字君鳳春日詩、亦能言病中之況、云、花開時節身多病、常負尋紅拾翠行、知得春光逼原野、近來連聽賣花聲、予亦有絕句云、病軀曾被寒欺得、

子才が云、張若駒五月九日舟中偶成の詩、水窓晴れて掩ふ日光の高きに、河上風寒くして正に潮を長ず、忽々夢回りにて家事を憶ふ、女兒の生日是れ今朝、此詩眞に是れ天籟、然れども女の字を把り、一の男の字に換へば、便詩を成さず、此中の消息、口言ふこと能はずと、余深く悟ることあり、

陸放翁が詩に云、糶米歸り來りて午未だ炊かず、家人竊に憫む老翁の飢るを、知らず筆を弄す東窓の下、正に淵明食を乞ふの詩を和せんとは、清人魏懋堂が山中積雪に云、寂莫たる山涯又水濱、天に漫し地に匝し白して銀の如し、前村報道す溪橋斷ゆと、喜ぶ可し債を索るの人来り難きを、皆貧中の趣を極盡する者なり、夫貧と病とは人の惡む所なり、而して詩に入るときは則佳なり、絲井翼、字は君鳳、春日の詩の如き亦能く病中の況を言ふ、云、花開くの時節身多病、常に負く紅を尋ね翠を捨て行くに、知り得たり春光の原野に逼き、近來運りに聽く花を賣る聲、予亦絶句有、病軀曾被寒に欺き得られて、

不出茅檐半月來、知道江村已春好、門前來
賣滿開梅、可以與君鳳詩並誦。

有秋岡游字賽魚者、性耽詞曲、又頗解詩、嘗
寓予瘦梅菴、有故亡命、今不知其所在、予記
杉田村觀梅一詞云、梅花白點、山屏看不夢、
生客眼青、溪送溪迎、千曲折、路似曾經、此
時、呵樹垂楊被風吹、一樣香、玉兔昇、金烏未
墜、真箇奇創。

或爲余誦題畫虎之句云、想像深山草木風、
沉雄痛快七字盡之矣、余不復願觀其他、只
恨失作者之姓名。

余常摘近人之句錄之、時一出觀之、足以慰
一日三秋之思矣、聯句佳者、今川剛侯云、酒美
因城近、魚肥爲浦豐、鷹野魯屋云、品茗風過、

茅檐を出でざると半月來、知道江村已に春の好きを門
前來り賣る滿開の梅と、以て君鳳が詩と並べ誦す可し。

秋岡游字は賽魚といふ者あり、性詞曲に耽り、又頗詩を
解す、嘗て予が瘦梅菴に寓す、故ありて、亡命す、今其在る
所を知らず、予、杉田村に梅を觀るの一詞を記す、云、梅花
白點す、山屏看るに夢ならず、生客眼青し、溪送り溪迎ふ、
千曲折路曾て經るに似たり、此時呵樹の垂楊風に
吹かる、一樣に香し、玉兔昇り、金烏未だ墜ちずと、真箇
の奇創なり。

或ひと余の爲に畫虎に題する句を誦す、云、想像す深山
草木の風と、沉雄痛快七字之れを盡す、余復其他を觀る
ことを願はず、只恨らくは作者の姓名を失すること。

余常に近人の句を摘んで之を錄す、時に一たび出して之
れを觀る、以て一日三秋の思を慰するに足れり、聯句佳
なる者、今川剛侯が云、酒の美なるは城の近きに因る、魚
の肥たるは浦の豊なるが爲なり、鷹野魯屋が云、茗を品

面、背醪春到脣、北條士仲云、晚程鴉背日、霜
 信馬頭風、橋本子行云、拂柳風飛粘屐絮、捲
 花波送載薪舟、所柳灣云、花梢餘落日、灘底
 起輕雷、院暗僧歸早、山紅日暮遲、余門人菅
 中菴云、柳邊風有力、苦上雨無痕、垣内淡齋
 云、熟路皆生景、新知如舊交、又有結句佳者、
 島梅外、三月易過七八日、明朝雨歇出看花、
 吉川子愿云、病身還怕新涼到、脫卻生衣著
 熟衣、又有五七字單句佳者、魯屋之竹瘦轉
 添神、星孟喬之風添潮勢、海生烟、岡村養拙
 之日、永林中野鳥飢、柏舒亭之漁網孤、村月
 句至窮愁清且新、皆是也。

すれは風、面を過ぎ、醪を嘗むれば春脣に到る、北條子仲
 が云、晚程鴉背の日、霜信馬頭の風、橋本子行が云、柳を
 拂ふ風は屐に粘する絮を飛ばし、花を捲く波は薪を載す
 る舟を送る、所柳灣が云、花梢落日を餘し、灘底、輕雷を
 起す、院暗くして僧歸ること早く、山紅にして日暮るゝ
 こと遲し、余が門人菅中菴が云、柳邊、風に力あり、苦上、
 雨に痕なし、垣内淡齋が云、熟路、皆生景、新知、舊交の如
 し、又結句佳なるものあり、島梅外が、三月過き易し七八
 日、明朝雨歇ば出で、花を看ん、吉川子愿が云、病身還て
 怕る新涼の到ることを、生衣を脱却して熟衣を著く、又
 五七字單句佳なる者あり、魯屋が、竹瘦て轉、神を添ふ、
 星孟喬が、風は潮勢を添へて海、烟を生ず、岡村養拙が、日
 永くして林中野鳥飢ゆ、柏舒亭が、漁網孤、村の月、句は
 窮愁に至りて清く且新なり」と、皆是れなり。

詩聖堂詩話終